

「加賀家文書」の調査研究から～その 37 「加賀家文書と私」

調査員 戸田 峯雄

1. 加賀家文書との出会い

そもそもの始まりは、昭和51年7月に「別海町史編纂委員」に任命されたことだった。幾度かの会議が開催される中で、「幕藩時代」を担当する。

さて、手元には、何一つない。なにをどうすればよいのか。

ともかく、『根室市史』『標津町史』等に、再度目を通す。なんと、「加賀家文書」の中から「ノツケの耕地のこと」が載っているではないか。しかも、絵図までそえてある。「これだ！」

早速、秋田の八森へ行く計画を立てる。編纂事務局のすばやい対応で8月に実現の運びとなる。前もって事務局から連絡をして戴いたんで、当主の加賀康三氏は準備を整えて、待っていてくださった。

江戸時代に、しかも、野付半島の「ノツケ」で書かれた「文書や絵図」に巡り会えたことだ。早速、持参のカメラに収める。これが、「加賀家文書」との最初の出会いであった。

その翌年も八森の加賀さん宅へ、やはりカメラに収め、町史に取り入れました。

2. 「加賀家文書」を読む

本格的に読み始めたのは、「加賀家文書館」がオープンした平成12年からでした。既に、『加賀家文書』加賀伝蔵【筆録】秋葉実【解説】として、別海町教育委員会が平成元年に発行していました。これを元にして、「加賀家文書」を多くの方々に親しんでいただくという趣旨のもとに『加賀家文書現代語訳版』として発行することになり、原稿を書くために読み始めました。

3. 『加賀家文書現代語訳』

(1) 伝蔵の履歴

伝蔵が蝦夷地に渡る前、14歳までは八森で生活していたのであろうが、詳しいことはわからないが、代々「アイヌ語通辞」としての家系で、初代徳兵衛から、蝦夷地での生活の心得等を授けられていたようだ。

蝦夷地の「クスリ場所」のクスリ（釧路市）会所で、「飯炊き」の見習いに始まり、一通りのことを身につけ、チョクベツやセンハウシの現場で実習し、再び会所に引き上げられ、「仮帳役」にまでなった。この「クスリ場所」での「文書」も「加賀家文書」として残されている。これらを読むと、「場所」での仕事の大部分は身につけたようだ。

天保年間の終り頃に、「子モロ場所」の「ノツケ」に移り、「通辞勤め方」として定住した。当時、「子モロ場所」は藤野が請け負っており、しかも、子モロの会所には、兄

である「鉄蔵」が勤めていた。この子モロ場所の「ノツケ止宿所」などでの生活が最も長く、多くの文書等が残された。

この後、安政年間の終りになると、子モロ場所は、「ニシベツ川の古川尻からチャシコツ、ここから「シカルンナイ」を境として、子モロ側は仙台藩、北側は会津藩に分割された。藤野が「シベツ場所」を返納するまでは、そのままであったが、会津藩が警衛するようになると、伝蔵は、会津藩の仕事もするようになり、シベツ場所の支配人になったのである。

「クスリ場所」「子モロ場所」「シベツ場所」の三か所での「文書」が「加賀家文書」として残されている。明治5年に故郷の八森へ帰ったようだが、明治維新の頃の記録等は、まだ見つかってはいない。

(2) 『加賀家文書現代語訳版』

前述したように、『加賀家文書』秋葉実 翻刻版を基にして「現代語訳」をしたのであるが、「加賀家文書」の大部分が、子モロ場所を請け負っていた時の文書の控えが多く、他の文書、特に「藤野家文書」により、理解を深めるといったこともしばしばであった。本来ならば、「藤野家文書」を読んだ後に「加賀家文書」を読み、『現代語訳』に取り掛かるのが筋ではあったが、余裕がなく果たせずに終わった。

更に、「加賀家文書」は、まだまだ「未公開の文書」も残されています。まだまだ研究の余地は残したままです。

「加賀家文書館」での勤務は、3月一杯（3／22）で終わります。この日には、第9回「加賀家文書館歴史講座」「幕末の別海」の様子の中から、

1. 「ニシベツ川一件」 2. 「種痘」 3. 「ノツケでの耕作」 4. 「子モロ場所の分割」 5. 「アイヌ人口の減少」の概略を（10：30～12：00）お話します。私事ですが、長い間のご支援・ご指導に感謝しております。

●加賀家文書歴史講座のお知らせ

幕末の別海～日記ノツケ伝蔵から～

加賀伝蔵の日記から幕末の別海の様子をご紹介します。

- 日 時 平成21年3月22日（日）午前10時30分～12時
- 場 所 郷土資料館
- 講 師 別海町郷土資料館 調査員 戸田 峯雄
- 定 員 30名（電話・FAX・メールにて氏名・電話番号をご連絡ください。）

別海町郷土資料館だより No.116

発行日 平成21年3月1日

発行所 別海町郷土資料館

別海町別海宮舞町30番地

電話 0153-75-0802（FAX 兼）

e-mail kyoudo@betsukai.jp

編集後記

3月一杯で本館の勤務を終えられる戸田峯雄さんは、「加賀家文書」に長くたずさわりの、その研究のパイオニア的な存在でした。その知識と経験は、加賀家文書館建設時から建設後も、教育普及などに精力的に取り組んでいただき、多くの方が「加賀家文書」の存在意義を知ったことと思います。長い間ありがとうございました。（石渡）